



水をきれいにするのに、水草を使うって本当なの

水草が減ると、水中の生き物は生きていけない

昔と比べて今は、工場の排水や、家庭から出るさまざまな排水などが流れこんで、川や池などの水のよごれがひどくなり、問題になっています。また、あちこちの川につながっていた田んぼや、ため池などがうめ立てられて、そこに生えていた水草が姿を消しました。

水草が減ると、それまで水草が成長するのに使っていた養分が、水のよごれとして、川や池の水の中にたまってきます。逆に、それまで、水草が光合成（日光の下で、葉で水と二酸化炭素から栄養分を作り、酸素を出す）で水中に出していた酸素は、減っていきます。すると、水中でくらすこん虫や魚たちは、生きていけない環境になってしまいます。

水草に養分を吸わせ、酸素を作らせる

そこで、短い時間で急激にふえる、ホテイアオイとか、ウキクサなどの水草を、栄養分がたまりすぎている川や池に、人間が入れてやります。

ウキクサは、水にういた葉のわきに、小さい葉がいくつもでき、その葉が、やがて、親の葉からはなれて、また、小さい葉をふやすというふうにして、一つの葉が、10日ぐらいで20倍にもふえます。

ホテイアオイも、イチゴと同じように、長いランナーとよばれる特別のくきをのばし、くきの先に、次々新しいホテイアオイの芽が出て、どんどん、ふえていきます。ホテイアオイは水面にういたまま、大きな葉や花をつけ、水中の養分をたくさん使ってくれます。

水面に広がったこれらの水草を、秋になって集めれば、水の中は酸素がたっぷりあり、多すぎた養分が減って、水はきれいになっています。また、水中には、いろいろな生き物がふえているはず。集めた水草も、よい肥料になります。（監修・矢野 亮）

